

「たる」11月号の掲載は、心齋橋大学・児童書クラス
「松川啓子」さんの「十五年目のラブレター」に決定致しました！！

東京作家大学 × 心齋橋大学 共同連載
生徒が紡ぐ、“酒と人”にまつわる story

今宵の1話

サブテーマは
「手紙」

第70話「十五年目のラブレター」
文／松川啓子（心齋橋大学）



「こ

れで全部だ」

運び終えた段ボール箱を見直し、
夫が振り向いた。
開け放した窓から十月の風が入ってくる。

「引越と言っても、呆気ないもんだな」

「最新の単身者用マンションって、体一つで
引っ越せるのよ」

クローゼットにハンガーを掛けながら、
私は答えた。

「家を買った途端に単身赴任。『会社勤め、
あるある』だな」

苦笑しながら、夫は窓に寄りかかった。

「だけど、今後のきみの事を考えたら、これ
で良かったよ。ただ……」

私は手を止めた。夫の声に、不安が混じっ
ている。これから少なくとも二年は離れて
暮らす。家事が不得手な私に、夫が不安を
感じるのは無理からぬ事だ。

勤続二十年の表彰を受けた後、私は地方
の再開発プロジェクトのリーダーに抜擢さ
れた。

私よりも、夫の方が喜んだ。朝早く、帰

りの遅い私に代わって、自宅でフリーラン
スの仕事をする夫が家事の殆どを担当して
いる。

もちろん、食事は買い出しから調理まで。

本人は、創作意欲が湧くからと楽しんでい
ようだが、本当のところはどうだろう。

夕方の新幹線で帰る夫を見送った後、部屋
で一人、荷解きの続きをする。食器をくるん
だ古紙を外すと、新しいお猪口と夫婦箸が出
てきた。シワだらけの紙に何か書いてある。

（手紙？）

クシャクシャの手紙のシワを伸ばし、ゆっく
りと指でなぞった。

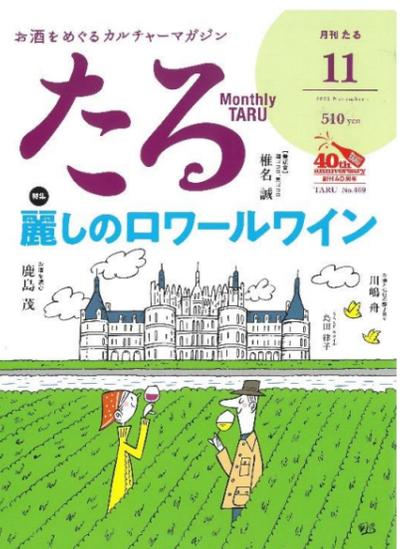
『僕がいなくても、ちゃんと食べること……
だけど、一人になると、僕の食事も怪しくな
るから、時々、ここで一緒に食べよう。晩酌
の酒は、きみが選んでおいてくれ』
（何だ。不安はお互い様か）

結婚して十五年。もう一度、付き合い始め
た頃の二人になるのも悪くない。次に二人で
晩酌をする頃には、ぬる爛くらいだろうか。

秋の夜風が、手紙を揺らした。

◎選考委員の講評

全体的に現代の世相を表しているのが面白い。
女性の社会での活躍がさらっと出ていて、夫婦の会
話からも愛情が滲み出ている。
文章力が感ぜられた美文と思う。



ご応募の先着 20 名様に月刊「たる」を進呈しております。
是非ご応募下さい。また、特別価格 510 円⇒400 円にて販売もしております。